大氣搖るがし亂るれば、
鳥は驚き友をよび
綠天蓋ゆるがして
百千に亂れ、白銀の
箙背に負ふ神將が
引番へ射る千束矢の
白羽のごとく光射し、
紫雲たなびく九重の
大宮めぐり鳴きかはし、
靄の御幕ひきかかけ、
東をさせば、天津宮
闇の夢戸を押ひらき
いま日の神のいでましに、
光白駒、飛ぐるま

萬の榮光、千々の彩
百の照姫從へて、
しろ銀の輪の小軌に、
雲は彩湧く時を載せ
まづほのしろむ黎明を、
天に薄るる星くづの
光の權者、靈清く
地に蘇る音響の
幽かにさらにひそやかに
力こもりぬ、ほのぼのと
黎明の霧に動ぎつつ
九百九町はやはらかに
醒むるよ。嘗て夜を高み
天ゆくだせし洗禮の

雪に五濁をそそげばか、
六根清く晶らかに、
離垢の法土を現ずるよ、
されば朝の氣朝の聲
清くすずしく爽やかに、
水に輪うち波をつたへ、
山の鼓膜にひびくかな。
それ日の本は神ながら
神づまります古國の
秀眞の國の朝ぎよめ、
四方清しき宮霧に
烏帽子、水干しら彩の
禰宜が拍手、寒祝詞
朗らに澄むや神殿の

大氣森たり、朝神樂
はや鏨々とうちいづる。
時に聖は先覺の
慈眼めぐらし數珠くりて、
滅ぶる子らに印導を、
死をまつ子らに教の光を、
傷める子らに慰藉を、
康けき子らに平和を、
生るる子らに幸福を、
うつや鉦鼓の律幽に
霧にむせびて三寶の
清きほこりは雲に入り
澄みて菩提をさそふべう、
伽藍の朝は磬の音に

はた鐘の音におのづから
清し淨土のかしこさを、
涙にあふぐ市びとが
耳を過ぎりてあきなひの
聲はさやかに、辻々の
車の軌、鈴の音、
足駄、華靴、雪に鳴り
繁く急忙しくなりゆけば、
いまか市場は武藏野の
木の實、青物、北國の
紅は林檎に、極熟の
禾木、花ぐさ、花たまき、
彩に人よぶにぎはひに、
美し子らは入り亂れ、

朝眼清しくまどふらむ。
さては魚河岸舟つくや
江戸は勇健の肌の文
聲の勢ひか手に活ける
魚の幾千、潑溂と
銀の鱗をひらめかし
海の新香を飛ばすらむ。
かなた、朝汽車轟々と
美しきゆめ若き夢
室は圓かに滿つる夜の
夢の二百里ひた走せに、
箱根足柄、曙の
濃霧縫ひつつ走りつつ
希望の都近づくと

百夢醒まし、市びとが
朝を警ましめ、朗らかに
寒天高くやや緩るく
笛鳴らしつつ迫るかな。
こなた、森なる樂堂の
雪の門守、寢そびれし
寢惚がほなる笑止さに
門ぬけば夏海の
高潮のごとひたよせて
亂れ入る子の後ろかげ、
ほの紅の霧透いて
幸と希望に光る見よ。
と見る眞紅は朝ぞらの
雲を彩どり譜を染めて

霧に流るる美しさ。
時いま、百の工場に
轟轟の音うまれつつ、
金は相槌ち石は鳴り
熱火飛びちる活劇と
大音響をもたらして
黑煙のぼるよ、笛鳴るよ、
けたたましくも凛として、
朝はいよいよ新らしく、
生存は力をどよもして、
ああ覺醒めゆく東の
覇國の都、かがやかに
天津御日繼いや高う
かく天照らす皇統の

天の御柱右ひだり、
いまし金簾緋とかかげ、
百士百官めぐらして
恩惠あまねく美はしく
國見そなはす歡喜に
霧は晴れたり、遠海の
朝の青はや、眉せまる
秩父遠山、筑波山、
富士、白雪のかんむりに
玲瓏として玉のごと
拉むよ、朝のこの都、
あはれ不滅の精力に
歡喜あれよ、幸福あれよ、
驕盛あれよ、光榮あれよ、

いま悠々と高照り
驕慢榮ゆる天日は
時の白駒驅りすすめ、
白銀の鞭、金の馬具、
輪車軋らす光道の
十方かけて煌々と
投ぐる金の矢銀の矢に
赫々として輝りかへす
朝の光に、千萬の
瓦高濤、金躍り、
銀きらめくや、流るるや
日本晴の天の青
涵たし盡くさむ勢に、
大地大都は一犬の

夢も許さず堂々と
遂に醒めたり、戛然と
いま噪然と囂然と
あら蘇る活動の
力、火となり、熱となり
電力となり、生類の
血となり、燃ゆる肉となり、
茲に全都の繁榮と
人を圓滿にすすむると
千万の聲、雜然と
遂に溢れて漲りて
天部貫く激しさに、
ああ地に匍匐る六尺の
短軀にひそむ精力の

偉大不滅をまさに見る
高堂の朝、樹下の人、
ああ眼にあまる驚骸に
讃嘆高く青春の
血潮熱搏つ両腕を挙げと
感涙せちにうちむせぶかな。

春海夢路

（燈臺前曲）

大風、　風、鷗浮く
春、紀の海の瑠璃波を
水路まろらに人のせて、—
人は優なる耽思にぞ、—

すべりゆく帆に磨きよる
ほの紅の漂ぐもや、
島の霞の香ににほひ、
幽かに薫る潮の音に
鳴門のどよみ――仄さむき
春の寂寥――美くしむ
春海夢路のあこがれを、
淡路は朝の紫に
よる波見ゆる白濱の
汐道からず、右ちかく
眼に青清き紀伊の山
和歌の浦、さて、玉津島
歌には古き名どころの
風雅優しみかへり見て、

日は温かきちぬの海、
千鳥通へば和泉路の
花もながるる波の上、
うつらうつらと水姫が
ありのすさびの雅歌のせて
島めぐり鳴る潮の香や、
通ふ小舟や、ゆく雲や、
歡樂慕ふ春の日の
さすらひ人が小瞳に
卷きてはひらく彩繪をば、
おなじ舟路に夢うつつ
美眼たゆみ凭る子もあらば
春の思ひは盡きざらん。

これより瀬戸の内海の
波の平らに青ゆりて、
淡路めぐれば須磨明石、
舞子の濱の薄霞、
白波飜る浦々の
美しき眺望にうつらうつら、
歌心ゆくまどかさを
和みうららに薫る日や、
鷗が夢もきらきらと
白銀走る波の彩、
彩はうつろふ島々の
霞の色の薄紅の
若むらさきの夕すがた
繞りつ、寄りつ、かへりみつ、

眞白帆ゆけば鳥飛んで
鱗族沈む深みどり、
青澄む鏡すべりつつ
走すれば、とみる、島と島
峽せまうして瀬は早し。

右は桃さく小松島、
左、ひと山、薄櫻、
春美はしき峽ながら
花くぐり入る舟子らが
猛き心を醉はしめて
艪の音絶ゆるしばらくを、
荒波超えむ熟練者にも
衿驕ゆるさぬ難所ぞと、

ここに設けし燈臺の
清き祟高さ整へる
眞白の姿、譬ふれば
御相端しき懐しき
女神清らに立たすごと、
白日は櫻の花靄に
天をふくんで霞みたれ、
ゆふ、燈明の眸も美しく
桃と櫻のくらがりを
照らして遠く内海の
夜を守る靈の平和よ。

彌生、たまたま人戀ひて
筑紫へくだる詩びとが

夢も美しき舟の旅、
霞たなびく夕ぐれの
烏が臙脂の裳をかかげ
危く過ぎる峽の青、
颯と風たてば桃さくら
繚爛として亂れちる
花の彩渦、花飛沫
逆さ落しに逃るれば
水平らなる淵の上、
落花輪つくる彩波に
舟をとどめてふりあふぐ
白壁高き島の臺、
見よ、黄金なす波の穂へ
影嚴かに暮れゆけば、

櫻夕日に照り榮ゆる
島より島へ、青波へ
女神のみむねふくみつつ
白鳥かろく飛びかよふ
瀬戸の内海の夕まぐれ。

櫻青巖、花白藻
潮彩鳴り波薫る
夕繪の榮に古き世の
島のにほひのうるほひや、
清らゆかしみ舟よせて
磯の青よりうかがへば、
暮れゆく島の趣を
靜かにまもる燈臺の

白壁ちかく、美くしう
花と咲いたる面影や、
櫻肌透く白衣に
綠ながるる髪五尺、
頰に亂さば地にも曳く
乙女傲驕、眉あげて
人戀ふらしき眼眸に
春海たゆけく眺めつつ
夢見彩姿、あえかなる
島の女王は戸に立てり。
いま悠々と春の舟
日は温かに花ふかき
み天を慕ふさすらひに
かくて夕ぐれ——汝が眼の

繪に青刷いて紅溶いて
紫染めし――春海路を
歌うてよぎる詩人が
思ひはるけき夢や夢、
同じ春守る憧憬を
快樂滿ちぬとうれひなば、
ああ美くしき寂寥の
額にせまる夕まぐれ、
せめては熱き愛の歌
ひと節遠く流さずや
ああその紅き唇に、
清し瞳にさくら頰に、
優肩すべる黑髪に
若き命はあふるるを、

などさりげなき謹慎に
花にかくれて身も小さう
思ひも暗う暮るるぞや。
ああ吾堪へず、願くば
乙女よ胸の戀の火の
燃ゆるがままに青春の血の
ゆらぎ湧き立つ傲驕を
ああ憚らず、いとせちに
夕日の領は彩飜る
物美くしき天地に、
美くし韻與ふると
ああ生命ある熱情の
律呂と熱き戀の譜を
舟路に高く傳へずや。

春のひと日を欄干に、
玉の臺に、緋さくらに、
美くし人に、花の野に、
桃の林に、彩鳥に、
わか草山に、清瀧に
彩照り通ひ薫りつつ、
美しつとめ爲し了へて、
花やぎ雲の七重八重、
藍むらさきに、黄に、樺に
なほ榮のこす紅の
落暉が畫く戀の繪や、
七彩變る濃霞に
對ひ親しき山と山、

水と天との綠もて
朝ゆふべを物語る
なかに居睡る九十九の
紫ゆかし島の靄、
綠ひろぐる夕ぐれの
內海は繪絹、照り薫る
千々の彩波、百白羽
彩に微妙じきながめをば
夢かの如く、大淵の
緩るき翻りにただよひて
島さかりつつ走りつつ
舟はしばしもとどまらず。
舟はしばしもとどまらね、

島の乙女が歌聲は
幽かになほも耳さらず
暮れゆく波にうかびては
戀ひし小舟の艪の軌り
相呼びかはし近々と
すれ違ひたる容貌の
ゆくら、春舟、春すがた、
浦戀ひ照らむ男ぶり
聲へば海の深緣、
姫が戀路に呪はれて
水に三とせの戀ごもり、
戀ひらる戀のまどかさに
快樂盡きぬと青いづる
浦の島子が給姿に

凛々しさまがふ色白や、
緣髮づら、廣額、
美少、瞳も晴れやかに
笑ひ優なる眉會釋、
春の子なれば笑みかへし
「いづれ」と問へば「櫻さく
美しき島へ」と引く艪手に
つつと別るる舟と舟、
天は紫うつろひて
雲鈍色に薄らへば
潮の香さむき收まりに
水鳥ひそむ薄闇の
朧のなかに、想像の
快樂むさぼるしばらくよ。

まづ浮びくる戀譚、
朝ゆふべの潮鳴に
緋櫻よする紅島の
島の乙女は濱を戀ひ、
夜な夜な點もる愛の灯の
美しき眸にあこがれて
濱の美少は島を戀ひ、
櫻流せば灯を點もし、
灯ともせば花を投げ、
互みにかはす眞心を
何時しか合の藍島の
九十九の翁がさとりえて
さらばと結ぶ花戀の

彩をし思はば、あなかしこ
嚴島姫守護り給ふ
内海の平ら、とこしへに
愛の灯火美しう
夜の伽まゐれ、變らじと、
ここに番ひし旨守りて、
島の夫婦は繪のごとき
海の小島に繪のなかの
雛のごとくもすまひける。

朝まだきこる燈明に
しらじら霞む紅島の
櫻折戸を右ひだり、
男は山に女は谷に

薪をひろひ花を折り、
霞をくぐり露を踏み、
山と谷とに應へつつ
戀の山彦美くしむ
夫婦が歌ぞ美しけれ。
日は午となれば殷の雛、
薪、草花、生業の
積荷美しう、ゆらゆらと、
舟艤しつ、帆を風に
委ねて波の青に乘り
離るとみれば靄の中、
別離に霞む平和を
島と海とにいとほしむ
夫婦が歌ぞ優しけれ。

夕となれば姫の雛
巖にかのぼる領布やふる、
背はいまそぞろ戀しさの
つらき憧憬に眼もうるみ、
市に求めし夜の料、
油、醪酒、米、青菜
さても、七彩友禪の
美し衣つみそへて、
引く艪押す艪も華やかに
漕ぎかへりくる島の波、
妹はほの照る夕波に
鷗とまろぶ眞白帆を
美くし眼もて、のびあがり
咽びつつ待つ平和を

嚴と水とに響かして
愛の歡喜彩傳ふ
夫婦が歌ぞ樂しけれ。

春の日暮れぬ。櫻灯に
妹と夕餐の膳の前
愛の歡語、戀語、
美くし怨言あとにして
夕のつとめ、美くしう
のぼる階段も輕らかに
嘉にならぶ妹と背が
美くし眼晴に夕ぐるる
硯の海のおぼろ波、
朧の波にさ迷へる

百の白帆も、くろふねも、
海人の小舟も、釣ふねも、
波の北より、東より、
潮の西より、南より、
愛平らかに靜かなる
母のふところ慕ひよる
稚子のうれひの哀れさを
救世の驕とほほ笑に
心會しぬる眉と眉、
王と女王は嚴かに
夕の闇をすかしみて
愛の火盞に愛の灯を
今宵もかくて平和に
美くしうこそ點すらめ。

いま想像の彩伸羽、
起伏かろき夢が香の
にほひ趁ひつつ、醸へしつつ、
豊かに深き歡樂の
胸にあふるるしばらくを、
涙もうるむ圓満かも。
はてしなければ春の血の
きほひ夢追ひ彩かける
翼靜かに納めつつ
垂れし頭をもたぐれば、
あら額を射る閃光よ
想ひも疲れ眼もかすみ、
夢の香戀ふる夕闇を

現か、さても胸搖りし
想ひの園のまぼろしか、
朧にむせぶ薄靄の
波迫かなる天の戸に、
闇路つらぬき燦然と
走しる火光よ、ああこれぞ
島の燈明、美くしの
内海の守灯

平和と
幸と恩愛をまろらかに
春海夢路の榮守ると
い照り美しう紅の
火の輪火の線きらかに
迷へるものを導きて

微笑むごとき春の眼や、
空想花波くりかへし
また幻影の彩趁ひて
さらに燈明をながむれば、
ああ我知らぬ畏こさに
涙は頬を傳ふかな。

知らずわが舟わが思ひ
またも朧の夢が香に
霞むとみれば越し方も
我ゆく末も朧おぼろ、
朧の波にゆられつつ
舟の歩みは遲々として
迷へばのぼる薄月の
薄ら明りにほのぼのと
浮身も靈も霞みつつ、
つひに水路を忘れつるかも。

繪草紙店

上

春や錦繪、大江戸の
精華を盡くせる賑ひに、
さても、八百八町の
さくら祭のはなやかさ。
伊達の小袖や、花笠や、
櫻かつぎや、繪のなかの
麗姫と若衆が花やぎを

ほんのり照らふ夕月に
朧ろ靄ふる家なみや、
暮るれば點もすさくら灯の
定紋紅かき錦ちやう、
なかに玉屋と華美きそふ
繪草紙店の花あかり。

繪には老舗のたかぶりに
店豐かなるよそほひや。
柳、さくらの軒さきは、
百の球燈、花つらね、
繪の間、繪の間は唐銅の
緣、錆浮く燭臺の
緋の美艶に照り薫ゆる

七彩ずりや、錦繪の
稚子よ、局よ、櫻男よ。
江戸繪は、昔いまやうの
寬潤衆、花魁、俳優の
似顏、浮世繪、新版の
三枚つづき、二枚もの。
花鳥艶なるあぶら繪や、
名所雙六、花双紙、
光明眩ゆき耀きに
繪は繪と亂れ、驕樂よ
豪華よ、奢侈よ、美よ、慾よ。
榮極まりて、百千彩
左右壁なす玻璃鏡に
彩と光明は照り亂れ

亂れ射りつつ飛びちがひ
臙脂、紫、紅、綠
燦爛として皆繪也。

中

彌生、繪守の夜な夜な
彩香にまどひつかれてか、」
室麗らかに春ごもる
女主人の名は阿京。
紅屋に生れし風流に
優しかるべき眼も呼べと、
春のひと夜を大店の
繪の光彩擧げて繪のごとき
美しく子らにゆだねたり。

さても三たりの花むすめ。
かしらは阿王、なかは花、」
すゑは阿照と名も優に
嫋び艶なるおとどひが
情こまかに色ふかく
姿、身の振、しなやかに、」
牡丹彫りたる唐銅の
火鉢かこみて袖まろう
花友禪の紅ちらし
百花うかぶ座布團に
ふはりと坐る美くしさ。

媚美はしみあこがれて

店の繪に寄り、繪の精の
戀の嫋びに曳かれ入る
櫻がへりのさくらびと
五人、六人、七八人、
夢見ごこちにたたずめば
羞ぢらひほてる頰をあげて
麗姫の三人は芍藥の
彩照るごとく、春の夜の
千々の繪に立つ妖艶やかさ。

繪に飜へす振袖は
華麗盡くせる耀きや、
金紗に千鳥繡ひあげし
藤むらさきの伊達模樣。

下にかさねし三枚の
襟は紅ゐ、菊の彩、
肌に沁みたる伽羅の香と
縺つれて繡は燦めきぬ。
さても婀娜めくねび姿、
よろづ都の流行の
華美をまねびの女氣や、
腰に締めたる薄紅色の
扱帶をすべる錦地の
帶は西陣、彩しら茶
お大鼓結び、立矢の字。

母の風雅を血とうけて
嫋びそろひし繪の精が、

生命と愛でて美くしむ
長七尺の黒髪や。
姉のふたりが結ひやうは
縁つゆ滴る高島田、
妹は稚子髷、耀やかに
銀簪、小櫛、灯に照りて
鏡に照るや、並びては
歌舞伎に見たる上臈と
百媚きそふ嬌羞に
か弱き春の寵兒らは
恍惚として血はたぎり
思ひ亂るる戀ごころ
焦がれて寄れば、燦として
眼の前よぎるふり袖や、

そらせば翻へる錦繪や、
眞白玉手や伽羅の香や、
そむけば自己も繪の中に
麗姫と繪と照る玻璃鏡や、
魅られ心地繪に立ちて
繪を買ふすべも忘れつつ、
かくて百人、百の手の
櫻落してながむるよ。

櫻月なり、みやこなり、
物見高きは春の夜の
一刻愛惜しむ歡樂に
戯咲わかやぐ群いくつ。
人美くしきさざめきを、

興がる灯ぞと肩越しに
隙見ねたみ見くぐり見る、
さくら振袖、花小袖、
彩よる波のうつくしさ。

時に阿照は三千の
繪と繪のひまを、一々の
蠟とり代ふる燭の役
花照る灯ささげつつ
胡蝶に似たるひらめきに、
彩繪彩袖すりぬけて
飄々、飜へす花たもと、
艶にい舞へば繡金の
千鳥も連れて舞ひ亂れ

浪戀ふらしき風情はや。
阿玉阿花はいちやうに
錦繪ひさぐ店の役。
會釋、愛嬌、艶やかに
人をそらさぬ言いひや、
顧客ませば媚そへて、
いよいよ驕る身のこなし。
まこと春夜のあきなひは
麗姫が贋のほほゑみに
榮と美興をたてまつる
戀の稚子らが戯咲なる。

ことに幻妙きは繪草紙の

戀の活靈、眼に滿ちて
智慧の光をまどはする
燦ら驕よ、千人の
わかき繪匠が熱烈の
血ぞほとばしる戀の彩
凝りて灯に照る光見よ。
彩と光はそのかみの
快樂に人を憧憬れしめ
醉はせ狂はせ血を煽り
眼をそむかせず、香とともに
春の脈搏つ和胸に
い捲き抱かれ、熱浴びて
活きつ薫らむ運命もて
生息あるごとく輝くよ。

されば犇めく幾百の
袖の花波彩合し
牡丹花とみる一園の
眞紅、緋の彩、相亂れ
翻へりこぼるるたちまちを
店の灯にちる花瓣よ
袖よ、美少よ、亂れ手よ。

それと繪にそふ姉と姉、
阿照、手ばやく袖襷、
はらり、袖くち、緋のあふれ。
玉手可愛ゆく、膝たてて
莞爾、小髪かきあぐる

鏡は映つす横顔や、
彩つと消えぬ、袖と袖、
千鳥、紫、亂れ亂れ
姉そぞろはし、繪に人に
灯は耀やかに、彩衣や、
血のけほの照る優頬に
夢かの波の照ゆれて、
ゆらら、繪に搏つ美瞬や。
繪は延べ捲かれ、緋に抱かれ
また新らしく飜へる
起伏、波の彩はやく
飛魚潑ぬる手さばきや、」
春日、木づたひ、鶯の
囀づるごとく麗らかに

繪のそら冴ゆる嬌音や、
瞳は絶えず情ゆれて
春の媚賣るいそがしさ。

「さればこの宵、この繪店、
幻惑ふかき歡樂の
春や、彩繪と花姫と
美し子らが花やぎに、
譬へば天上の花祭
夢に見えたる靈境の
美興、微妙じき春のごと、
彩亂るれば戀滿ちて
血のけおぼゆる夜の空氣
灯に照り微動ぐぬくもりや、

美くし醉は小躍りて
智識とろかしはびこれば、
驕はわかきあきなひに、
興、繁まさる山吹や
黄金の音も婀娜めいて
歡樂刻む時しらず、
夜は美くしく榮えたり。

下

夫れ、春の夜の歡樂は
牡丹の紅のひと花の
地に翻へるまの生命のみ。
いま。一團の袖の花
快樂極まる驕もて

彩は亂れぬ。時逐ひぬ。
こぼれ盡くせる花びらの
人はむなしく彩ふかき
春のにほひを胸にして
翻へる深夜をいかでまた
花美くしき紅ゐや、
千花がなかに驕るべう
夢にかへす興あらむ。
時、華やかに花ぐるま、
左片輪に快樂のせ
右の片輪に愁のせ、
美興追ひつつ花踏みて
軋るや、迫る悲愁に
袖美くしう搔きあはせ、

錦繪抱いて繪の店を
三々五々、一人、一人
人はいでけり歸りけり。

江戸は祭の櫻小夜、
月の光は町屋根の、
瓦に寒く薄らぎて
市のどよみも靜まれば、
おほかた消ゆる町の灯や、
街をへだてて大通
そぞろはしげに行きちがふ
雪駄の音の幽かなり。

夜やふけぬらし。町つづき

玉屋が軒の万燈も
紅ゐ暗う、町の隅、
軒下、小溝、家の隈、
さては路次より寂寥の
せまるとはなく靄ながれ
薄闇まよふものの香の
月光のうすれにゆらめけば、
いま、人去りし大店の
朧ろ百の球燈、蠟盡きて
消えなんとするあまたたび、
その都度、春のかなしみ○
脈うち蘇へり生息ついて
美くしうこそにほひ入れ
縱令しや、紛の間は煌々と

燭照りわたれ、いかでこの
飽彩、とある壁繪より
壁、板の目、土間の隈
落ち散るさ枝、薄ざくら、
物かげつくる物みなの
あはひ匂ひつつ、冷やかに
泌み入るうれひ抑へえむ。

ああ美くしき物の氣の
店に滿つ夜の森閑と
廣澄む家の大いなる
かへりみるだに物かげの
闇まさりゆく寂しらや。
三人はそぞろ娘氣の

ただなにとなく華かに
美くし肌を捲きしむる
春の愁に堪へかねて、
灯によりそひつ、花炭や
灰のほてりに、袖なけて
かこむ火鉢を美はしみ
玉掌かさねて、膝と膝
春は深夜の靜まりを、
戯けて通る醉どれが
唄も澄みゆく淋しさよ。

繪のあきなひの花やぎは
若き心をかざれども
驕は店に咲きかをる

黄金の花の彩ならず。
戀にうまれし女子の
美し生命は彩ふかき
色と姿のととのひに
心の春のよろこびや
わかき男が胸の火の
焦がれて燃ゆる唇に
唇紅熱つく吸ひよせて、
血は湧きかをる花やぎに
思はふかく、夢が香の
波の情に身は搖られ
快樂、憧憬、彩しめて
焔の宮にねむるこそ、
人に戀はるる少女子が

驕にそへむねがひなれ。
春の夜なればうら若き
胸の炎に血もゆらぎ
情せちなるあこがれに
少女が瞳燃え燃えて
興じて立てば灯は靡き
驕りて添へば繪は驕へる
歡樂ふかきたはぶれを
笑へば百の子は魅られ
焦れつ醉ひつ曳かれよる
驕傲美しき宵のまの
戯咲、夢なる花櫓
想は追ひて花に眠る
三たりがさまをねらひつつ

白蛇、美しき執念の
けはひ、ひそかに寂寥の
いより捲きつつ沁みにしか。

阿玉阿花は宵のほど、
少女嫋びの驕傲に
戀はるる戀を侮りて
少人棄てし寂しさや。
いま、犇々と息やせまる
櫓くづるる亂れ彩。
坐るに堪へめ煩悶にぞ
狂ほし心地、伏し亂れ
男戀ひしう血もゆらら、
咽べば、袖の繡千鳥

音に鳴きつるる紫や。
阿照は十五、初心氣の
戀ふとにあらね、朧ろげに
華かなるを美くしみ、
愁をいたむ一人をば
寂しとのみに、なにとなく
前髪姿うつくしき
人なづかしう戀ひそめぬ。
譬へば靄の紅梅に
朝日花やぐ風情あり。

かくて秘戀美くしき
三人、そぞろに頰をよせて
袖うらかさね、春の夜の

愁に堪へぬほほゑみに
より添ひ寒むき時しもよ
あら、幻妙かしや。とある灯の
ひとつ消ゆればまたひとつ、
つぎつぎ、店の高燭の
消えつつ、終り百番の
守灯花蠟瞬たいて
あれよと見る間、煌々と
照よみがへる一刹那、
九十九本の灯は盡きて
一時に光る耀きや。
繪はことごとく彩活きて
燦爛、陸離、錦照り
戀照り美照り榮い照り

神秘、歡樂、玻璃鏡の
面走すれば燦として
美妙の世界現じつつ
不思議、千種の錦繪の
綠、紫、紅、黃金、
彩の亂れの耀きの
なかに清らや、玉のごと
立つは鏡の活靈か
若衆嫋びの伊達姿
眼は清やかに眉秀で、
春あけぼのの振袖に
黃金づくりの大刀帶いて
燦びやかなる裝ひに、
品威凛々しく華やかに

四方(あたり)眩ゆく清照るよ。

あなやと三人、氣もそぞろ
今、眼に滿てる現象の
眩ゆさ清さ不思議さに
顫(わな)なき、恐れ、亂れつつ、
さて美くしき憧憬(あこがれ)や。
阿玉は立ちて黑檀の
柱を楯に袖かさし、
阿花はすべる座薄團の
花の上(へ)、膝にのびあがり、
阿照は下に手をついて
羞ぢらひ若うすかしつつ、
少女ごころの妖艶(あで)やかに

鏡の若衆、秘戀の
美はし精を美はしみ
ひたぶる燃ゆる胸の火や。
戀慕は色に顯はれて
一入頰はかがやかに
小瞳うるむ歡樂を、
とどめかねたる春の血の
亂れゆらげば身も靈も
火焰(ほのほ)、花なす物ぐるひ。
得堪へず、亂れ駈けよるや。
パッと輝く斷末魔
とみる、九十九、百番の
守灯ことごと、闇の香の
漲り吸ひぬ。照消えぬ。

落破や、店の間、絵か靈か、
一千、二千、三千の
錦躍りぬ。彩飛びぬ。
赫奕、燭に活きつつや
活きぬ、闇迅し、絵を放れ
靈亂れ飛ぶくらがりよ。
悲愁盡きぬ。榮滿ちぬ。
歡樂、春を妖艶やかに
美し羽衣綾ふりて
寥かき亂す燦光よ。
紅ゐ、綠、環よ、綵よ、
繪のそら、靈は彩織りて
狂ひ、飛び、舞ひ、環り、散る

これ魔の興か、奇し靈の
花やぎ、今を酣に
とみる、唐繪の揚貴妃も
李氏も褒似も虞美人も
錦江戸繪は姫氏國の
小町、業平、赫奕姫、
紫の上、光る君、
さては歌舞伎の維盛も
淨瑠璃姫も牛若も
槍の權三も清十も
お夏も戀の清姫も
お七吉三も梅川も
美男の羽左も梅幸も
伊達を嫋びに舞ひ浮かび

光榮と驕に亂るれば、
花は緋牡丹、かきつばた、
櫻、姫桃、百合、薔薇、
彩を盡くして散りこぼれ、
繽紛、春を薫ずるよ、
鳥は鶯、彩孔雀、
鸚鵡、白鳥、丹頂の
鶴は翼を翻へし、
飛びつ、亂れつ、舞ひ遊ぶ
ああ興美しき歡樂よ。
なかに三人の花むすめ、
戀の火焰に氣は亂れ
心すずろに、黑髪や、
はらら、振袖うちふりて

駈けり狂へば、繪の美靈
亂れも艶に熱浴びせ、
炎、花吐き、彩繞り、
血の氣煽れば、むすめ氣の
憧憬ふかく情せちに
戀の歡樂、咽び音に
祈禱、花伏す戀と戀、
亂れ興ずる繪や靈や
薫香滿つ夜を燦爛と
美くしいかな繪草紙の闇。

靈場詣

行けかし、さらば南國の番の御寺へ。

春なれば街の少女が華やぎに、
君も交りて美くしう、戀の祈誓の
初旅や笈摺すがた鈴ふりて、
大野のみなみ菜の花の黄金海透く
筑紫みち列もあえかのいろどりに
御詠歌流し麗うらと練りも續く日、
軟かぜに繪日傘あぐる若菜摘、
法師、馬上の騎士たちも照りつ亂れつ
菅笠に蝶も縺るゝ暖かさ。——
はじめ御山の清水寺。
風雅古る代の繪すがたか、杉の深みの
薄ざくら花もちりかふ古みちを、
六部、道心、わか尼のうれひ靜しづ
鉦うつや、袖も濕ふゆきずりに

靈場詣、杖かろく、番の歌ごゑ
華やかに、巡禮衆が浮あゆみ、
峽は葉洩ねの日のわかさ風も霞みて、
春の雲白ういざよふ靜けさに
鶯鳥けば、ちらちらと對の袂へ
笈摺へ、薄ら花ちるうらゝかさ。——
かくて靈地の莊嚴に古るき杉立つ
大木の霧の石階ほの青み、
白日の灯ともる奥深さ、遠みかしこみ
繪馬堂へ、——櫻またちる菅笠や、
音羽の瀧に紅ゐの唇も嗽がむ
街少女、思もわかき瞳して
御堂のまへの靜寂に鈴ふりならび
ぬかづくや、金の香爐の薄けぶり、

縫蓋蓮華の闇縫うてほのかにそらへ、
星の如佛龕に光る燈明の
不斷の燃り、内陣の尊さ深さ、
先達に連れて献ぐる歌ごゑも
後世安樂の願かけて巡る比丘らが
罪ならず、戀の風流の遍歴に、
心も空も美くしうあこがれいでし
君なればそゞろ涙も薫るらむ。——
あるは月夜の黄金みち、菜の花ぞらの
星あかり朧ろ煌めく野の靄に、
鬢の香吹かれ仄白う急ぐ樂しさ、
灯は街に、——枝垂柳の樾路は
紅提灯の軒つゞき桃も鄙めく
雛祭、店のあかみに伏眠して

奉謝を乞はむ巡禮の清しさ、わかさ、
夕霧に少人忍ぶそゞろきも
艶めかぬほど、頰にゑみて鈴もほそぼそ
普陀落や」練れば戸ごとの老御達
春のひと夜の結縁に招ぜむ杖と
白髪ふり、轉び、袖とる殊勝さや。——
行けかし、さらば南國の番の御寺へ。
春なれば街の習慣美くしむ
戀の祈誓の初旅や、母にわかれて
少女らと、朝な夕なの花巡り、
やがて遍路の悲愁に雲も騒立ち
花ちらふ卯月とならば故さとへ、
あゝ妻なよび髪ねびて、我戀ひ待てる
新室に歸りこよかし、いざさらば、

彌生はじめの燕、袖すり光る
麗ら日を、君も行くかよ、杖あげて、
南無や大悲の觀世音、守らせたまへ、
朝風に、あゝ巡禮の鹿島立。

南國

ああ、君歸れ、故郷の野は花咲きて
わかき日に五月柑子の黄金燃え、
天の青みを風ゆるう、雲ものどかに
薄べにのもとほりゆかし。――歸れ君、
森の古家の蔦かづら花も眞紅に、
醒へれ、君はいづこに、――北のかた
柩まうけの媼さび、白髪まじりの

寒念佛、賢し比丘らが國や追ふ。
ああ鬱憂の山壬檪の天、日さへ黑ずみ、
朽尼が涙眼かなしむ日の鉦に、
樾の林檎紅饐えて蛆こそたかれ。
歸れ、君、――筑紫平の豐麗に
白がね鐙、わか駒の騎士も南へ、
旅役者、歌の巡禮、麗姫、奴、
繪だくみ、うつら練り續け。なかに一人、
街道や藤の茶店の紅き灯に
暮れて花搖る馬ぐるま、鈴の靜けさ、
四とせぶり、君も歸らふ夕ならば
靄の赤みに、夢ごころ、提灯ふらまし。
朝ならば君は人妻、野に岡に、
白き眼つどへ、ものわびし、われは汀の

花菖蒲、風も紫の身がくれに
御名や呼ばまし、逢見初め忍びしわかさ
薄月に水の夢してほそぼそと、
ああさは通へ、翌の日も、山吹がくれ
雨ならば金絲の小蓑、日には跑、
一の鳥居を野へ三歩、駒は木槿に、
露凍の忍び戸、それもほとほと
牡丹花ちらぬほど前へ、そよろ小躍れ、
薔薇みち、踏めば濡羽のつばくらめ、
飛ぶよ外の面の花麥に。
あれ、駒鳥のさへづりよ。
籬根近し、忍び足、細ら口笛
琴やみぬ、衣のそよめき、さて庭へ、
（それと隱れぬ。）そら音かと、（空は澄みたれ、

また鳴らす。）ほゝゑみ頰に、浮あゆみ
棟、柏の薄ら花ほのにちる日の
君ならばそゞろ袂もかざすらむ。
はや午さがり、片岡の畑に子ら來て
早熟の和蘭覆盆子紅や摘む
歌もうらうら。——風車めぐる草家に
鯉のぼり吹きこそあがれ、こゝかしこ、
里の女は山梔の黄にもまみれて
糯や蒸す、あやめ祭のいとなみに
粽まく夜のをかしさか、頰にも浮べて
わかうどは水に夕の眞菰刈、
いづれ鄙びの戀もこそ。
君よ、われらは花ぞのへ、
夕榮熱き紅罌粟の香にか隱れて

筒井づつ振分髪の戀慕びと、
君吾燃ゆる眼もひたと、頬ずりふるへ
そのかみの幼な追憶――君知るや
フランチエスカの戀語――胸もわななけ、
人妻か、罪か、血は火の美くしさ、
激しさ、熱さ、身肉の爛れひたぶる
かき抱き犇と接吻け死ぬまでも
忘れむ、家も、世も、人も、
ああ、南國の日の夕。

鉦

人みな往にぬ、うすらひぬ。
森の御寺の夕づく日、
ほの照り黄ばむさみしらに
やがて鉦うつ一人の
その夜ぞこひし、野も暮れよ、
あはれ初秋、日もゆふべ、
落穂ふみつゝ身はまよふ。

補遺

小鳥

小鳥は飛ぶ、彼はその飛ぶことすらも
曾て悟らざるがごとし、
小鳥は飛ぶ、金色の光に飛ぶ。

小鳥はただ飛ぶ、形なき一線に飛ぶ。
さながら翼つけし獨樂の
とめてとまらぬその迅さ。

かぎりなき大海の上、
ただひとつころがれる日輪の
朱紅の圓さ。

小鳥は飛ぶ、一線にその面を横ぎる。
かなしくも突き拔けむとす。
小鳥はこの時まさしく小鳥の姿となる。　「畑の祭」

夏

近景に一本の葦、
遠景に不二の山、
不二よりもさらに高く、
新鮮に葦は戰げり

影

山嶽の上をゆく
雲の輕さ、
水にうつる
山嶽のかげの重さ。

光のみ

日は光れり、鏡の中に、
光のみ照りかがやけり、
そはあまりに眩し。

日は光れり鏡の中に、
冷やかに照りかがやけり。
そはあまりに遠し。

遠し、遠し、遠し、遠し……

眞實

自らの眞實を眞實とすること、
金を金とし悲しむこと、
吹く風のおのれそよぎ、
薔薇と野菜のむきむきに咲き、
鳥の飛び、魚のおよぎ、蟲の匍ふこと、
男をんなのつつましく連れ添ふこと、
みなあはれなり、しんじつに、
みなあはれなり。

疲れ

微風は純金の足のうらより
こそばゆくも笑ふかな。
微風はきたる、足の指の
その間を洩れて君が眠りに。

以上五篇「大悲集」

白秋詩集 第二卷（普及版）

定價 壹圓五拾錢

昭和三年七月八日 印刷
昭和三年七月十五日 發行
六十
八十

著者 北原白秋

發行者 北原雄鐵
東京市小石川區表町一〇九

印刷者 山本源太郎
東京市牛込區東五軒町一〇

編江・本望

發行所 東京市小石川區表町一〇九
振替東京二四八八番
電話小石川三五七〇番

ア ル ス

北原白秋著作集

詩集

邪宗門　易風堂　明治四十二年三月十五日
思ひ出　東雲堂（のち東雲堂より發行す、大正六年六月增補訂正す。）　明治四十四年六月五日
東京景物詩　東雲堂　大正二年七月一日
印度更紗　金尾文淵堂　大正三年九月一日
白金の獨樂　金尾文淵堂　大正三年十二月十八日
わすれなぐさ　阿蘭陀書房　大正四年五月三日
雪と花火　東雲堂（のちアルスより發行す。）　大正五年七月一日
（ローマ字）思ひ出　阿蘭陀書房　大正七年七月二十三日
白秋詩集第一卷　アルス　大正九年八月二十八日
白秋詩集第二卷　アルス　大正十年一月一日
觀相の秋　アルス　大正十一年八月一日
水墨集　アルス　大正十二年六月十八日
白秋詞華集　新潮社　大正十四年六月十日

小唄集

白秋小唄集　アルス　大正八年九月一日
あしの葉　アルス　大正十三年十月十三日

民謠集

日本の笛　アルス　大正十一年四月十日
大正十三年十月十三日改訂版發行

歌集

桐の花　東雲堂　大正二年一月二十五日
雲母　阿蘭陀書房（のち、アルスより發行す。）　大正四年八月十二日
北原白秋篇　抒情詩社　大正六年六月五日
木馬集　アルス　大正八年七月十三日
第二木馬集　アルス　大正九年十二月十日
雀の卵　アルス　大正十年八月二十三日
北原白秋選集　アルス　大正十一年一月一日

童謠集

とんぼの眼玉　アルス　大正八年十月十五日
兎の電報　アルス　大正十年五月十五日

北原白秋著作集

北原白秋著作集

まざあ・ぐうす　アルス　大正十年十二月十三日
祭の笛　アルス　大正十一年六月十日
羊とむじな　アルス　大正十二年十月十五日
花咲爺さん　アルス　大正十二年七月十五日
白秋童謡集第一卷　アルス　大正十三年七月十日
子供の村　アルス　大正十三年五月五日
お話・日本の童謡　アルス　大正十三年十二月二十五日
二重虹　アルス　大正十五年三月二十日
からたちの花　アルス　大正十五年六月十五日
象の子　新潮社　大正十五年九月十六日

散文集

白秋小品　阿蘭陀書房　大正五年十月三十三日、のちアルスより發行す。
螢の指輪　春陽堂　大正七年六月二十一日
雀の生活　新潮社　大正九年二月二十日
童心　春陽堂　大正十年六月十八日
洗心雜話　大正十年七月十八日
季節の窓　大正十四年五月三日
風景は動く　大正十五年六月二十七日
藝術の圓光　昭和二年三月十五日
フレップ・トリップ　昭和三年二月二十三日

北原白秋氏著

水墨集・詩集

本詩集は氏にとつては更生の大詩集であり、日本詩壇にとつては正に空前の新聲である。本卷に收むる十四章二百數十の詩篇は美にして聖なる至上最高の詩境より滾々として珠玉のやうに溢れ出た靈魂の歌聲であつて、その的確なる表現、鮮新なる感覺、清高なる氣品、自由にして恍惚微妙なる韻律は萬有の神機に參入せる眞の詩人にして初めてよくし得るのである。あらゆる善惡、理非乃至宗教、哲學、科學を超越し飛翔する神秘光耀の藝術の世界がここにある。豁然たる神來の響きがここにある。混沌たる詩壇を照すべき唯一の詩集は本書である。

著者自裝・定價參圓五拾錢・送料拾貳錢

北原白秋氏著

季節の窓・隨筆集

本書は詩壇の王者北原白秋氏の年刊隨筆集とも見るべきもので、過去一年の四季風物のうつりかはりにものされた感想、小品、隨筆を悉く收錄されたものである。氏が澄み切つた輝ける詩眼を開眼いて時折漏らされた自然に徹したそれ等の言葉の深さ、新鮮さ、その微韻は宛らに讀者の胸に迫るものがある。けだし隨筆中の隨筆、生ける文範、靜夜必讀を薦む。

著者自裝自筆挿畫數葉入・定價貳圓五拾錢・送料十錢

北原白秋氏著

風景は動く・隨筆集

本書は「季節の窓」に次ぐ白秋氏の第二感想隨筆集で最近に於ける氏が藝術生活の全容を展開せるもの、童謠論あり、詩歌論あり、批評あり、讀書餘錄あり、自然觀あり、一貫する清冽の氣は蕭々として全卷に漲つてゐる。其透徹せる卓見、高邁の論評、纖細微妙を極むる自然描寫は氏が啻に詩歌壇の巨擘たるに留まらず、當代稀に見るエッセイストたるを示し、殊に卷末に附した「白秋一家言」四十餘篇は謹嚴なる藝術家としての氏が、藝術の本道と無限の光耀を片語隻句に收め其の秘奥眞髓を喝破した現代の詩歌論語として讃仰されてゐる。

著者自畫自裝・定價貳圓・送料八錢

フレップ・トリップ

北原白秋著

詩と散文との偉大なる融合
新鮮馥郁たる近代的表現！

見よ！ 丈餘の蕗と虎杖、燦爛たる楡の木の微笑、火焔と燕麥、緬羊と白樺、驟雨、驟雨、驟雨、壯快なる極北の大驟雨を！ 更に見よ！ 范漠鑞銀のオホーツク海、白金、赤光、紫金光、閃々光の中を飛翔する三十萬のロッペン鳥の大壯觀を、更に更に見よ、 刮目せよ！ 驚倒せよ！ 活動し、匍匐し、生殖し、咆吼する三萬の膃肭獸の大集團を、その爭鬪を、喧騷を、海豹島の大歡樂境を、赤裸々なる情慾の世界を此れ實に詩壇の巨擘白秋氏が北國樺太紀行『フレップ・トリップ』の一大雄篇である。見よ！ 詩と散文との完き融合を！ 新鮮潑溂たる近代的表現を！ 若さを、香氣を、律動を！

定價貳圓五十錢・送料拾二錢

北原白秋氏著

洗心雜話・詩歌の話

……何れにしても、わかりやすい誰にも解きやすい言葉で、たゞやさしく書いて見たいと思つたが、まだ言葉がいくらむつかしくなつたかも知れぬ。むつかしいものをやさしい言葉で說きわ・ると云ふ事はそれこそ何よりむつかしい事である。アッシジの聖フランシスがどういふ言葉で雀たちに說いて聽かしたかと云ふ事をしみじみと考へる。世の中のいろ〳〵なことはむつかしく見ればかぎりが無いが、そのじつ、ごくごくつきつめたところにゆくとやさしいたつた一言でも云へるものである。（中略）で、私のかうした雜話も考へると面が赤くなるだけのものであるが、いくらかでも心にとまつたものや、歌についてのいろいろな苦しい經驗の上から身におぼえのある事だけを何ひとつ知りえぬなりに、とにかく筆にとめて置いたといふまでである。

——（白秋）——

恩地孝四郎氏裝幀・定價壹圓貳拾錢・送料六錢

北原白秋氏著

藝術の圓光

・詩論集

詩壇にあること二十餘年、著者の熱情と、努力とは、詩藝術の上に、散文藝術の上に、何人と追從を許さざる彩華と光芒とを照遍せしめてゐることは、萬人是を認むるところである。

詩を以つて終始一貫する著者の一言一句は、眞に詩の大道を知らしむるのみならず、現代日本の詩と將來への呼びかけの言葉であり、純正なる詩道を聽かむとする人々にとつて必ずや、本書はその希求してやまざるものを與へるであらふ。著書の詩論は本書一卷によつて善くつくされてゐる。

恩地孝四郎氏裝幀　・　定價貳圓八拾錢・送料拾貳錢

北原白秋氏著

お話・日本の童謠

日本の童謠はどういふものか。それを日本の子供たちに、とりまとめて、わかりやすくお話したいと思つて、この『お話・日本の童謠』を編みました。日本の童謠は、何と云つても日本の童謠です。イギリスのでも、ロシアのでも、ドイツのでもありません。支那のでもありません。

昔から日本の山や、河や木や草や、氣候や、お話や、遊びや、さうした中から日本の童謠は生れました。代々の日本の子供たちから子供たちへと傳はつて歌はれて來ました。で、何と云つても日本の子供たちのものです。今は何んでも西洋かぶれがして謠でも遊びでも玩具でも、昔の日本の子供から傳はつて來た日本の子供のものがおほかた忘れられて了ひさうになりました。日本は日本です。日本の子供は日本の子供です。むろん、日本の子供も世界の子供として新しい進んだ子供にならねばなりません。然しやはり日本の子供といふことは根ざしを据ゑて、昔ながらの日本の子供たちから傳はつて來た大切なものを忘れてはならないと思ひます。かういふ考へから、私なども新しい日本の童謠を盛りかへしたわけなのですが、それには今までの日本の童謠といふものが何より大切なもので居ります。（白秋）

恩地孝四郎氏裝幀　・　定價貳圓五拾錢　・　送料拾錢

北原白秋氏著

日本の笛・民謡集

詩壇の巨匠白秋氏の新民謡集にして、これ民衆の言葉を以て民衆の生活、感情を歌へる眞の民衆の詩也。南風の港に鮪を追ふ素朴なる漁夫の唄。月光の濱に濡れて立つ海女の戀、髪は背の丈、油は椿、磯燕飛ぶ八丈大島の鄙唄月は桃色宵の月、マンドリンの爪彈を偲ぶべき輕快なる都會情調。博多帶しめ筑前絞、悽艶を極むる博多古調、南國の情熱、雪と落葉松、北國の驛路に咽び泣くが如き追分の哀愁等悉く歌ふべく謳すべし。今や民謡興隆の秋にあたり白秋氏の著まさに太陽の如く出でたり。

恩地孝四郎氏裝幀・定價貳圓五拾錢・送料拾錢

北原白秋氏著

わすれなぐさ・抒情小詩

少年老い易し、麗人は刻を千金の春夜に惜む。われらがわかき日の小詩はまさに涙を流して歌ふべし。瑠璃いろ空のかたはれにわすれなぐさの花咲かば、また過ぎし夜のはかなき戀も忍ぶべし。ここに選び出でたるはわが幼きより今にいたるあらゆる詩集の中より、ことに歌ひ易く調やさしき斷章小曲のかずかずすべてみな見果てぬ夢の現なかりしささやきばかり、とりあつむればあはれなることかぎりなし。（白秋）

山本鼎氏裝幀・定價壹圓八拾錢・送料六錢

北原白秋氏著

白秋小唄集

四六半截　定價壹圓八拾錢
箱入特製　送料六　錢

珠玉の如き小詩を飾るに珠玉の裝をなせる華麗無比の美本で、「雨はふるふる城ヶ島の磯に」の小唄を卷頭に歌ひやすく解し易く愛誦措く能はざるもの二百餘篇を收めた。尙餘錄として萬人の口に膾炙せる「さすらひの唄」「カルメンの唄」「別れの唄」等を附した。

恩地孝四郎氏裝幀

小唄民謠

あしの葉

四六半截　定價壹圓八拾錢
箱入特製　送料六　錢

白秋氏の小唄と民謠は實に日本詩壇の至寶とする所である。本書は氏の新作百八十餘篇を收むるもので、淸高な藝術的氣品が全卷に橫溢してゐる。裝幀は森田恒友氏、純白の羽二重に淸楚な葦の葉を描いたもので近來稀に見る美本である。

森田恒友氏裝幀

北原白秋氏著

とんぼの眼玉・繪入童謠

全國を風靡せる白秋繪入童謠集です。日本が生んだ最初の童謠詩人の傑作として永遠に傳ふべきは本書です。殊に本書の誇るべきは殆んど各篇毎に、一流畫家の華麗なる挿畫を附したことである。

定價壹圓五拾錢・送料六錢

兎の電報・繪入童謠

白秋氏の美しい繪入童謠集です。本書又名流畫家の挿畫を各篇毎に附し、童謠と相對して興味眞に盡きず。藝術愛好者はもとより、一般家庭に「とんぼの眼玉」と共に必ず備ふべき名著です。

定價壹圓五拾錢・送料六錢

北原白秋氏著

花咲爺さん・繪入童謠

子供達の一番好なのは、白秋先生の童謠です。子供たちの魂を清淨にしてよりよき豊かなる天地に遊ばしめ、その純心をますます先生の美しい童謠の力でぐんぐんと伸びさして、その心に花を咲かせ樂しい音樂をかなでさせるものは本書です。

定價壹圓九拾錢・送料十錢

子供の村・繪入童謠

新作の面白い童謠に例によつて御馴見の清水、深澤、永瀬の諸畫伯の美しい澤山の挿畫を童謠各篇毎に入れてありますが、白秋先生御自身も亦繪筆をとられて、挿畫やらカットやらを澤山御描きになりました。本書は今迄日本になかつた珍らしい大型な正方形をした見るからに感じのいゝ特製美本ですし純眞なる兒童讀物としてあまねく學校及び家庭に必ず一冊を御薦め致します

定價貳圓・送料十錢

388
347/1

終